

論文の和文要旨	
論文題目	ニヴフ語東サハリン方言の参照文法
氏名	蔡 熙鏡

本稿は東サハリン方言を対象とする。ニヴフ語を話せる話者の数はほんのわずかで、しかもその話者は高齢者のみである。東サハリン方言はその少数の話者のさらに一部である。このような状況の中で、東サハリン方言の文法を記述しておくことは喫緊の課題であると考ええる。本稿を書くにあたって、筆者は先行研究に収録されているテキスト資料と自ら現地調査で収集したデータを用いて分析を行った。

本稿は、全6章からなっている：導入（第1章）、音韻論（第2章）、形態論（第3章）、統語論（第4章）、テキスト（第5章）、語彙集（第6章）。第5章「テキスト」と第6章「語彙集」は付録に当たる章であり、それぞれ筆者が現地調査で収集したテキスト2本とニヴフ語－日本語の語彙をあげている。第5、6章を除く各章の詳細は下記のとおりである。

第1章「導入」

本稿の内容を理解するうえで必要であると思われる背景知識を提供する。具体的には、ニヴフの人たちの居住地域や人口、言語の系統、社会言語学的状況、東サハリン方言の文法概説などを述べた。

第2章「音韻論」

ニヴフ語東サハリン方言には6の母音と28の子音がある。音節構造は非常に複雑であり、音節の頭では最大2つ、音節末では最大3つの子音連続が可能である。語根末において、母音が現れる場合とそうではない場合で揺れが見られることがあるが、それは語中音消失 (vowel syncope) という音変化が起きている途中であるためであり、ニヴフ語の音韻論の

記述を複雑にする一つの原因になっている。強勢に関しては、原則として第一音節に落ちる。さらに、有声化や内破音化、頭子音交替が起こる音韻的環境と形態統語的環境についてもこの章で記述した。

第3章「形態論」

名詞に文法的な性・数のカテゴリーはなく、複数の概念は接語を用いて標示する。文末の直説法の動詞は、(代)名詞に付加される複数標識と同じ形式をとることがあるが、その際には主語が複数であることを表す。さらに、目的語に付加された複数標識が主語の複数性を表すことがあるということを新たに指摘した。ニヴフ語は主格-対格型の格標示体系を持つ。主格、対格、属格の形式上の区別はなく、これらの統語関係は主要部の規則的な頭子音交替によって示される。与格は稀に連続して現れることがあり、これはこの言語の膠着的な性格を示すとともに、与格の接語としての性格を反映しているといえる。1人称複数の人称代名詞には包括形と除外形の区別があり、1/2/3人称単数と再帰代名詞の場合は自由形と拘束形(接語)が存在する。

動詞は、いくつかのムードの形(直説法、命令法、疑問法)と様々な非定形の形(連体、副動詞)で屈折する。命令と一部の副動詞(先行副動詞、継起副動詞、等位副動詞)には、主語の人称と数で一致を示すものがある。ニヴフ語は未来と非未来で対立しており、東サハリン方言においては、未来は *-i~j* で標示されるが、非未来は明示的な形式を持たない。さらに、副詞節に未来の接尾辞が現れることはなく、主節以外では、もっぱら連体修飾節と補文節にのみ見られる。ニヴフ語におけるアスペクトの標示には、[1] 語幹派生接尾辞を用いる方法、[2] 補助動詞を用いる方法、[3] 動詞の重複による方法が用いられる。特に、意図や推測を表す接尾辞 *-ina* が「起動」のアスペクト的な意味に解釈される際には、動詞が表す状況の認識時点が意味の実現に大きく関わっているということを指摘した。

ニヴフ語の使役構文において、従属節と主節とでは、有情物の被使役者がとる格に大きな偏りがあることを指摘し、使役構文が表す意味の広さについて述べた。さらに、東サハリン方言の動詞複合体について、複合体を構成する接尾辞・接語・補助動詞の承接順序と機能についても記述を行い、統語的観点から先行研究の扱いとは異なった見方を提示した。

第4章「統語論」

自動詞主語を S(subject)、他動詞主語 A(gent)、他動詞目的語 P(atient)、複他動詞の2つの目的語を T(heme) / R(ecipient)、述語を V(erb) とした場合、ニヴフ語の基本語順は SV / APV /

ATRV ということができ、かなり厳格な主要部後置型のパターンを示す。名詞句においては主要部後置型の語順が義務的であり、語順を入れ替えることはできない。節においても上記の基本語順をとる傾向を示すが、目的語を節の頭に置くこともできる。ただし、その際には自立形の動詞を用いなければならない。

この章における複他動詞や連体節、疑問文などの文法的諸問題を記述するに際しては、近年の類型論的な知見や、通言語的な概念を踏まえ、近隣の言語との対照も視野に入れつつ、ニヴフ語の特徴を明らかにしていくことを目指した。特に、アムール方言において、‘comitative’, ‘correlative-associative’ として先行研究が扱っていた形式については、東サハリン方言では、「A=ASC B」「A=ASC B=ASC」構造においては、A+B が主語となり、「AB=ASC」構造においては、A のみが主語の扱いを受けることを、副動詞の人称と数による一致から判断できるという事実も新たに指摘した。

比較構文において、同程度のものの比較に用いられる動詞 *voci-*「同じだ／似ている」の機能を文法化の観点から記述した。例えば、本来の意味「同じだ／似ている」で用いられる場合は、比較の対象となる名詞が随伴者を表す接語で標示されるが、比較の対象となる名詞の直後に動詞が来る場合は「～のようだ」の意味に解釈される。さらに、意図・推測を表す接辞 *-ina* を含む語幹に付加されて、一種のモーダル的な意味機能を果たすことも示した。